国史学とアジアと仏教文物

池佐 藤 美 文 玲子 手吉 島田 崇一 裕彦

た者であり、 者の佐藤は、 日韓比較美術史などで活躍してきた研究者たちである。 私たちはい ほかのパネリストも、それぞれ国際交流史・ 日本の古代の政治と宗教を専門に研究してき わゆる狭義の思想史プロパーではない。 代表

趣

旨

史を遡及していく作業からはじまっている。そして研究史 私たちの研究作業は、具体的にはまず各自の専門の研究

評するものである。したがってこの小文の全体にわたって 見定めるということをめざして議論を交わしてきた。この の文責は佐藤にあることをあらかじめお断りしておく。 小文は、当日の報告内容や質疑を踏まえ、佐藤が記録・講 が傍観者ではなく、 オーマット (構造・様式) に至ったのかについて、それぞれ 内在的動機を持った研究当事者として

黒板勝美の宗教史研究と国史叙述 -仏教・神道・道教

表的著作に、 た。二〇世紀を代表する歴史家の一人である黒板勝美の代 吉田は、 黒板勝美の宗教をめぐる叙述について報告し 日本の国史の通史を叙述した『国史の研究』

門としてきた学問が、どのような経緯によって現在のフ どってきた。その作業過程を経ることによって、各自が専 から史学史へ、史学史から学問史へと抽象化する道筋をた

(吉田

一彦

指摘し、 説書が戦後の日本史教科書に継承された部分が多いことを いて言及を控えたのだと述べた。さらに吉田 その理由 黒板の個別研究の立場と概説書の立場に差異があるとし、 ては議論を全面展開することはない。吉田はこれについて 類では、宗教史の叙述は仏教史が中心であり、 で、「支那」の道教が日本に入り、 らは今日の日本の道教 それと「古神道」 書をなすいっ して「古神道」が形成されたと論じている。 おける道教、 更訂 戦後の歴史学、歴史教育では、 を黒板が日本の神祇祭祀と道教との関係を知って 国 ぽうで、 [史の研究』) 神仙思想の伝播・受容の問題に関心を持ち、 や仏教との関係について論究した。これ 個 ・神仙思想研究の先駆けとなるもの があ 別の学術研究においては、 Ź. 黒板は、 日本の神祇崇拝と渾融 日本の宗教史、 このような概説 しかし は、 道教につい 黒板の)概説書 上代に 文 概

にすぎないと説明されるのが常であり、 日本の道教受容はきわめて限定的で、 年にわたって学問の表舞台で論じられることはなか 道とのかかわりについては、 ては語られること自体が禁忌のようでさえあった。その 吉田の述べるとおり、 日本の道教受容の研究、 黒板が先駆けであり、 部分的に受容された 神道との関係につ とくに神 べった。 以降長

至っている。

関野貞に関する韓日

両国の

興味は高いが、

n

について両国の温度差がある

化史は仏教史中心の論説がなされるに至った事情を、

こう

した史学史によるところが少なくないとした。

という印象が残った。 このことについてはより注意がはらわれるべきではない すれば前者を純正史学、 史家が犯しがちな意味論的誤謬につながる可能性があり、 意味で吉田 「の指摘は重要ではあるが、 後者を応用史学に措定する、 その比 較軸は、 とも か

わゆ 関野 る日帝期朝鮮における仏 「貞の活動を中心に 教文物調 杳 池美玲

 $\widehat{\mathsf{H}}$

帝

強

V3

占期) 興味をひきつけた(尹喜淳・高裕燮等)。 著述した『朝鮮美術史』は発表当初から韓国 て、 紹介され、 寿永の「日帝期文化財被害資料」(一九七三)や、 立場について報告した。 |日帝時代の韓国美術史学」(一九七八) におい 関野貞および官学派は、 池 初めて韓国美術を通史的に体系化させた。 は朝鮮総督府 の朝鮮古蹟調査をおこなった関野貞の活動と学史的 当該期の文物輸出が注目されるなどして現在に の委嘱をうけて、 韓国美術史研究の胎動期 日本統治時代 戦後においては黄 研究者たち て官学派 のち関野 文明大 にお 0 が

関野 查報告』 の古蹟 『韓紅葉』 調査 0 成果物として出され [朝鮮芸術之研究] たの 『朝鮮芸術之研究 が 韓 国 建

調

鮮美術史を担当し、 鮮史学会が開 編 上記の書籍らとほぼ一致する 朝鮮美術史』 である。 これらをベースとして、 である。 た「朝鮮史講 その講義ノートを整理 その が構成は、 座 で 関野 特 楽浪郡を除外すれ 莂 して出版 講 は 演として朝 九三三 したの 年

韓国 否定しがたい 究者らにとって批判の対象となっているが、 朝鮮美術史 の美術が独自であることを定立するため ["]朝鮮美術史』に出ている関野の植民史観 ?鮮美術史』 が現在の韓国美術史と相関性が と池は指摘する。 以後、 韓国では関野の視角 「を乗 いっぽうで、 0 は韓 あることは 工夫が続 n 越え、 国 |の研 V3

史的記念物に登録

したのである。

フランス側

(印度支那総督府)

較対照しつつ、 発点としていたことに触れている。 可能性を ては 国 池 の模倣と説明し は史観の 示唆 すでに李成市氏が、 問題に触れ、 てい 朝鮮美術作品をその規模や技術に 、るが、 てい たこと、「 詳 関野が中国美術と朝 細な検討は 黒板勝美が指導 楽浪」 これら史観 これから を 朝 的 に関与した の問 鮮 以鮮美術を比 お 0 美 、段階に 問題につ 術 て、 0) 出

板 以勝美 0 南 調 査と 分日本

手島崇裕

る

手 島は、 研 究班のベト ナム踏査の成果を生かし、 黒 版勝

> 郎兵 0) 美らによる東南アジア地域 存に成功する。 ていた。それを生かし、 遺跡・文化財 た舞台を「国史の範囲」 ホイアン(フェフォ)で、 方向性にどのような影響を及ぼしたかに 黒板勝美の国史学は、 衛 · 具足君·潘二郎純 の調 査 保存方法を確立し、 かつて日本町が存在したベトナム と捉えた。 過去にさかのぼって邦人の活動し 0 信 日本人朱印 い調査 の墓を調査し、 が、 黒板は欧 日 船貿易家、 本 積極的に実践し ついて報告した。 に働きかけて 米視察を経て その永久保 という 谷弥次 玉

南 るべき場として国史の文脈に据えなおされるに至るの 南 るという見通しを得て帰国した。 代のように国 競合を予見した黒 南洋から姿を消した歴史の証でもあっ 洋に進出する布石 E 洋進 進 過去の邦人の墓を顕彰する行為は、 近が 近 本格 世初 出 0 花 期 理想像として具体性を増す。 南洋 すると、 「家のサポ 派板は、 日本人町のイメ の意味を持ったが、 南洋は、 j |-日本人の更なる南進は、 (国策) 朝鮮などと並列して語 1 彼の史蹟保存に裏打ちさ があってこそ可能とな ジは、 た。 鎖 日本人 国と同 そして昭 将来の 日本人の再び が .诗 Š 和十 朱印 他 に邦 たただび 玉 唱られ 人がが であ ح 船 時 0 南

古代観の組成過程と〈日本〉

(佐藤文子)

年〈八三三〉)には、律令用語としての「国家」について語律令運用のための公的解釈書である『令義解』(天長一〇

義解釈がつけられている。それによれば、僧尼令条文中の

天皇そのものを指していたことがあきらかである。て国家と曰うなり。」と解説され、この場合の「国家」が、「語及国家」とは、「敢えては尊号を指斥せず、故に託し

いということである。

は政治的理想そのものをさす理念上の概念であった。にとって「古代」とは、政権を掌握したひとびとにとってて、意図的に国民国家と混同させて説明された。近代日本いう大義名分によって政権を獲得した明治維新勢力によっこのような古代の「国家」は、理想の古代を復古すると

れた。一九〇〇年パリ万博を記念して編纂された Histoire 仏教文物を核に据えた日本像はまず海外にむけて発信さ

仏教文物を核として、文物を時代順配列にするというまっde l'art du Japon (パリ万国博覧会臨時事務局編、一九〇〇年) は、

たくあたらしいフォーマットをとっている。

変化していない、むしろ継承されている部分が無視できなについては、「戦後歴史学」者たちが、強調するほどには結論の一つは、黒板勝美以来、前近代のとくに古代の理解わたしたちの研究班がとりくんだ調査研究において得た

表者:佐藤文子)の研究成果の一部である。――仏教文物を鍵として」(課題番号:25370097、研究代――仏教文物を鍵として」(課題番号:25370097、研究代「アジア的観点からみた〈国史学〉の比較思想史的研究

(佐藤文子・佛教大学非常勤講師)

(吉田一彦・名古屋市立大学教授)

(手島崇裕・慶熙大学校助教授)(池美玲・藝術綜合大学校講師